

詩 篇

大和し美し

佐藤一英著

ボ
ン
書
店
版
定
價
五
十
錢

大和と美と

佐藤一英著

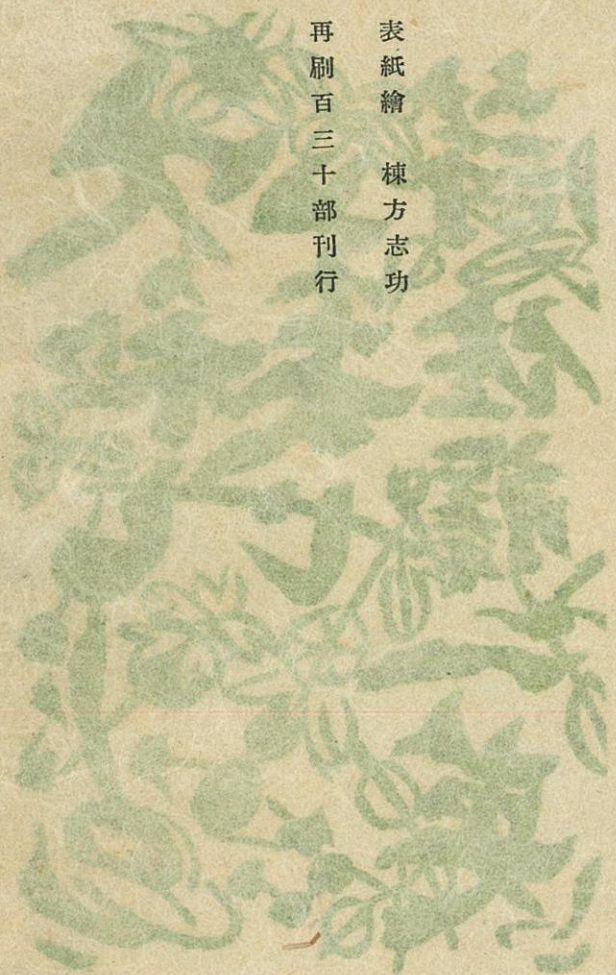


大和し美し

新編一英書

表紙繪 棟方志功

再刷百三十部刊行



大和し美し

大和は國のまぼろはたなづく青垣山隠れる大和し美し

倭建命

黄金葉の香りに散りて沼に落つれば、腕くにつれて底の泥その身を裹み離つなし……

われもまた罪業重くまとひたる身にしあれば、いかでか死をば遁れ得む

されどわれ故郷の土に朽ちざる悲しさよ

あゝ陽はいまや大和なる山の紅葉を耀かし

昔わが遊びし野邊や河岸に子供らの影ゆらめかす思ひあり……

かしこには一人の男の子、他の子らを制して草叢を分け、鶉の巢にぞ近づきたれ

その手にはおのが上衣を脱ぎてかゝぐ

またかしこには竹の弓もて柿の實を狙へる子あり、百舌鳥射損じての戯れか、額汗ばむ

ほど遠からぬ杉の木根元に母は幼児に乳房やりつゝこのさまを頬笑みて看る

子供らよ、さきく育てよ、母の背の杉にまさりて

されどいましら獵にいでん齡となりて

猪の牙を折るとも兄弟の頭を拉ぐことなかれ

ここにその兄をば弑りし咎めにて父には離れとつくりに骸さらさむ人の子あり

あゝされど何をか告げむ世は一瞬にして目覺むれば罪ある身なり

昨日伊吹は紅葉して空を染めたり

今日見ればかの大いなる猪のごとく白し

われ足萎へてイみしとき、農夫は稻刈るをいそぎむたりき

いま彼等は檜柵火をめぐり新らしき飯ほぼばらむ

たゞわれは苦き汗を吸ればよし……

ああ美夜受、汝が参らせし酒の香ぞこの汁にこもれる心地す

しかれども藥を毒と變ずるは汝が柔かきかひなにあらず

なればかの夜、無知なる百合花の咎もなく搖ぎて匂ひ惱ませり

腹太き蜂そのうちに飽くなき情慾を横へ眠りき

汝の髪に顔を埋め、われ父を弑しまつらむ夢にふけりぬ

いづれか罪の深からむ、母となる人を盗みしわが兄と

われ自らの夢にふるへおののきし

さるにわれいましてが甘き息のもと、再び酔に落ちしこそわが過なれ

汝はいまもわれを待つらむ、あゝ美夜受、われ待ちがてに襲の欄にまたも月のたゞむとき
契りて置きしわが劍かひなにまかむ

かくてなれわが肉身を得ざるにぞ、まことの愛を學ぶべし……

あゝ歸らざる昨日をなげき一昨日のなげきぞ新らし

鎧まとへる若者ひとり山坂の岩角に立ち、誇らかに來し方遙かにふりかへる、そは昨日のわれなり

征矢飛び來つてわが楯に中ると見れば燕なり、身を翻へしわが肩を掠めて去りぬ

世は眞夏、野はかぎりなき海にも似たり

住家みな輝やく波におほはれて人なきごとし、まことの營みは恒にかくあり、そを知らざりしこそ

わが愚なれ

われは感じぬ、なき妻のいまはの歌の一節ぞ勝利の鼓に優れるを

あゝ橋、思ひぞいづれ、かの日空は暗澹として雲落ちこむ景色なり

淵さながらの空を劃りて涯もなく葦は穂を並む

われら道もなきそのなかをひたすら進みき

なれの頬をここに血を滲ますに

われ氣づかへば、なれ何事か不吉なるものを感じしごとく

——道速振神の住むてふ大沼はいづれにあらむ、その氣もあらず、怪しあやし

かく言ひも終らぬうちに驚群をなし葦原を飛び立ち去りぬ

時もあらせず一條の煙昇れり

——かしこにも、なれの指さす方既に一團の焰はあがる、そはわれらを謀りて焼き殺さむとする賊
の仕業なりけり

げに愛するものは明智こそ得るなれ

わがをばより賜りし袋を開けむことをすゝめしもなれなりき

げに愛するものは勇氣こそ得るなれ

わが劍もて葦を薙ぎゆくしろうよりそを掻き集め、かの袋にありし火打ちもて火を放ちしもなれなりき

賊向ひ火にあふられて逃げ散りしうち、われ焼跡の灰にまみれし櫛を見いでてなれに示せば、なれ
莞爾として亂れたる髪を束ねぬ

圖らざりきその笑顔いままほ見るがごときに、その櫛のみこたびは濱の白砂に半埋るを見いでむ
とは

われは濕りてやゝ黒ずみしその櫛を手を受けしまゝ茫然たりき

かくもわれとは縁深く、なれの肉身の一部かと思はれしその櫛に、あはれなれの髪香さへかぐを

得で藻草の香のみ蔽はむとは

亡ぶには七日を待たず、されどそはまだよし

愛うすくして罪深からむ鞆には亡ぶに速き忘れあり

なれ失ひし悲しみも渡の神の牲となり浪にのまれし束の間ぞ

風、海の底より起り、波、空を行く折しもあれ、忽然と波間に消えしなれの顔、その白き幻も朧に
おりし鳩にはあらで、明日また浮びはいでじ

さるにあはれわがころにはたゞ黒き血に燃え猛る鷲の翼ぞ擴がりたり

やがてそは牲をのみて跡をも見ざるかの暗き走水の浪にもまして翔け去りぬ……

あゝ父の愛喪ひてなほ愛を信じゐたし幼き頃ぞなつかしき

望みも果てし暗き築地のわが胸にふとも香る梅の花、そはわがをば倭の御衣裳に移りし肌の香ぞ

あゝ倭われかつてお身の胸に抱かるる思ひに酔ひてお身の御衣裳に鎧せり

わが身裏に溢れし力はわれのものならで、母のごとく温きお身の愛にてありしなり

さるにわれわが力に優る熊曾建を討ちてよりお身の御衣裳をわが妹の肌をたのしむ夫の心に感じ始

めぬ

呪ひやいかで免れむ、神に仕ふる處女子の血をも穢さむ夢みしものに

われふるさとを幾山河雪雲深きとつくにに死なむといふもことほりなれ

あゝ倭、お身の名を再び呼べばわが目にはふるさとの空晴れ渡り、山々は肌も露はに現はるる

そはわが子いかに見悪くからむも、そをはぐまむころには人目もあらず胸をはだける母をさな

がら光浴びたり

昭和十一年四月二十八日印刷 昭和十一年

五月一日發行 佐藤一英著作 東京市豊島

區雜司ヶ谷町五ノ六七七（振替東京五九〇

七八番）ボン書店鳥羽茂刊行 定價五十錢



大和は國の美深か保た大
美し 伴建命
大和は國の美深か保た大
美し 伴建命
大和は國の美深か保た大
美し 伴建命

ボン書店版

